

中国語俳句の可能性

—— 華文二行俳句の実験を中心に

呉 衛峰

東北公益文科大学総合研究論集第三十五号 抜刷

二〇一八年十二月二十日発行

中国語俳句の可能性

——華文二行俳句の実験を中心に

呉 衛 峰

俳句が国境を越えてJughaとなり、国際俳句が各国で多くの言語によって詠まれている現在、中国語圏でも後を取れないように、詩人たちは「俳句」という旗の下で、様々な短詩型を実験し、創作している。

しかし、「現代俳句」のように音律に拘らず俳句美学の一側面を取り入れた現代詩にせよ、「漢俳」のように五七五音律をそのまま中国語に取り入れた定型詩にせよ、何をもって俳句の本質とするかという問題に対して、国際俳句の立場から未だに統一した答えが見付かっていない。

本文は中国語詩歌における俳句の受容状況を考察する一方、中国語俳句の現状を分析し、「華文二行俳句」の実験を中心に、形式と内容の両面から如何なる中国語俳句が俳句美学の本質に近づけるかを考える。

一、漢俳

現代中国語詩歌においては、1920年代初頭の「小詩運動」¹を除いて、1980年までは俳句の影響が散発的で非常に少なかった。1980年に、日中友好文化交流の中で、「漢俳」という五七五形式の新詩体が当時の中日友好協

(1) 中国語俳句の可能性 —— 華文二行俳句の実験を中心に

会副会長の趙朴初によって発明された。

緑陰今雨来

緑陰 今雨来る

山花枝接海花開

山の花が海の花に枝接して開（さ）く

和風起漢俳

和風 漢俳を起こす²。

というように、最初は押韻する漢文定型であった。「漢俳」という名称もこの作品が初出である。趙氏の当時のもう一つの作品は、

見尽杜鵑花

見尽くす 杜鵑花（つつじ）を

不因隔海怨天涯

海を隔つるに因りて天涯を怨むことをせず

東西都是家

東西都（みな）これ家なり

というように、夏の季語である「杜鵑花」が取り入れられているが、両方とも日中友好を謳歌する内容であった。

その後、多くの詩人学者が漢俳創作を始め、漢俳は徐々に普及された。漢俳の発明の背景には、二つの要素が考えられる。一つは、日中友好ムードの中で、日中交流に参加する日本側の文人が大方漢詩を理解でき、創作もできることに對して、対等の礼儀として、中国側も日本の古典詩型の俳句を受け入れたのであろう。一つは、俳句は20世紀においては、欧米を中心に世界の国々で受容され、創作もされていることが背景にもあったのではないかと思われる。

ただし、右記の趙氏の漢俳にも見受けられたように、初期の漢俳は自然を諷詠することで俳句と一致するが、現在の

いわゆる「伝統俳句」の重要要素である「切れ」、「取り合わせ」、「直接的印象」などは取り入れておらず、どちらかというと五七五形式の「漢詩」に近い。文学的価値よりも、文化交流の象徴という意味が濃いといわざるを得ない。

1981年、漢俳のもう一人の創始者である林林が訪日時に以下の漢俳を書いた。

花色満天春

花の色 天に満ちて春なり

但願剪来一片雲

但だ願わくは 一片の雲を剪り来りて

截作錦衣裾

截ちて 錦の衣裾を作る

この作品は雑誌『俳句』に連載され、翌年、日本の辞書にも収められた。林林は俳句の翻訳と漢俳の作り方について感想を述べた。

日本の俳句を翻訳するにあたり、俳句という短詩型の特徴、つまりその精神と形式を理解しなければならぬ。(翻訳するとき)文字の非常に少ない詩句に圧縮し、豊かな感情と深遠な意味を包含する必要があるので、暗示と含蓄の手法を用いて、読者にその余情余韻を味わわせるべきである。(中略)日本の俳句と比べれば、漢俳は「くどい」という誇りをまぬがれない。(中国語では)一文字ずつ意味があるからであり、中日の言語的特徴の差異によるところだと言えよう。³⁾

林林はさらに山本健吉がまとめた俳句の三大要素である挨拶・即興・滑稽に触れ、日常生活の情趣とユーモアに富む漢俳を試みた。一例を挙げる。

春意何其多

春の息吹が満ちあふれている

騎自行車也拍拖

自転車に乗りながらのデート

沿街唱恋歌

通りから通りまでラブソングを歌う⁴

漢俳の規則については、紀鵬が、「漢俳は俳句の基本（十七音、季語）とわが国の文字特徴、漢詩と小令などの中国伝統詩型を参照して作られた新詩型である。（中略）季語については、即興と叙情および挨拶の場合は使用し、滑稽等の人事の場合は使用しないほうが良からうか。言葉は漢文でもよし、漢文と現代文の混淆文体でもよし、現代文でもよしと思う。（中略）漢俳は厳格的ではない押韻をする。韻を踏まなくても構わない。平仄まで取り入れることもでき、作者の習慣に任せるべきであろう」とまとめている。⁵

最初の漢俳詩集は香港詩人の曉帆が1991年に上梓した『迷朦的港湾』⁶である。曉帆の漢俳は同時期の漢俳詩人と比べて、現代詩の要素を多く含んでいる。一例を挙げる。

「琴手」

「バイオリニスト」

自從那一夜

あの夜

彈響了你的心弦

君の心弦を響かせて

我才算琴手

私はやっとバイオリニストとなれた⁷

ただし、曉帆による有題俳句は、台湾詩人の陳黎の「現代俳句」とはむしろ同類であり、三行書き・五七五を除けば、日本の伝統俳句と通じるものがさほど見当たらないと言ってよからう。

現在、漢俳という名称のもとで、種々様々な中国語短詩型が試みられているが、伝統俳句において重要な「切れ」と「取り合わせ」が欠如しているものが多いので、正岡子規が唱えた「写生」を含め、そこにどれほど俳句美学が現れているかは疑問である。

二、台湾の中国語俳句

陳黎が『小宇宙——現代俳句一百首』⁸⁾で見せた「現代俳句」は、1990年代の台湾における「俳句ブーム」の中で誕生した三行無題の現代詩である。その一首目を掲げる。

他刷洗他的遙控器

彼はリモコンを洗う

用兩棟大樓之間

二棟の高層ビルの上に

滲透出的月光

にじみ出た月光を使って

「月光」でリモコンを「洗う」という比喩法はモダニズム的であり、日本の俳句には見られない修辭法である。このような「現代俳句」と通じるのが、二年前から中国本土と台湾の両方で流行り出した「截句」という四行以内の短詩型である。

歴史的原因によって、台湾では二十世紀の初頭から、日本語で俳句が書かれていた。その伝統は日本式教育を受けていた一部の老詩人によって今でも継続されている一方、右記の中国語俳句ブームの1990年代から、日本語で俳句を書いていた台湾俳人も中国語俳句の模索を始めた。

『台湾俳句歳時記』を上梓した黄靈芝が日本語で俳句を創作しながら、1993年末、台北で「漢語俳句教室」を開き、「切れ」と「取り合わせ」を取り入れた「湾俳」を教え始めた。黄氏は「湾俳」の教え子たちの作品を紹介しているので、数首を掲げよう。

海浜拍武侯 花蟹做配角

(時代劇撮影花蟹浜にのこのこ出)

新学期 校外麵攤又漲価

(新学期お八つの店はまた値上げ)

吸香煙吐煙霧 愚人節

(四月馬鹿たばこの煙の輪を吹いて)

白雲上 燕子綴黒痣

(白雲の痣を綴れる燕どき)¹⁰

これだけの例句では「湾俳」の全体像をつかめないが、「中国語詩」としてはまだ詩のレベルまで到達していないのが大半であり、入門者の習作という印象が強い。いずれにしても、黄氏が亡くなった二年後の現在、すでに「湾俳」の実践を聞かないという現状は、その成果の如何を物語っている。

詩人詹冰が黄靈芝と同じく日本占拠時代に日本式教育を受けており、日本語で俳句を書く経験もあったので、1989年から、俳句定型の五七五を四六四に縮めた中国語の「十字詩」定型を創り、提唱した。詹氏は「1. 簡潔、2. 留白(言い尽くさず余韻を残す)」を十字詩の二大長所として提唱していた。¹¹詹氏の十字詩を数首紹介する。

① 玫瑰露 閃亮一下 就滴落

バラの露 ちらつと光って 落ちていく

② 綠田中 只看白頸 鷺鷥群

青田の中 白い首だけ見える サギの群れ

③ 春日長 樹上小鳥 打哈欠

春日が長い 木の上の雛鳥 欠伸する

具体的に見ると、①④はともに、最初の上三が季語の働きをしている。②と③の上三の後ろに「切れ」があると考えても良からう。ただし、語彙と文法は現代語であるが、三四三という定型のため、中四と下三のリズムから、無理に分断された七文字の散文という印象を受ける。しかも、短い現代語の定型であるので、形式が言葉の選択を制約してしまう上、童謡のリズムに類似することで児童詩に分類されることが多い。そのためか、黄霊芝の湾俳と違って、詹冰の亡くなった現在でも模倣する人がいるが、大方は日本語と俳句を理解しないゆえ、作品も季語と切れのない短詩型になり、文言（漢文）が使われる十字詩も現れた。

三、華文二行俳句の実験

インターネットのお陰で、詩作の発表も紙ベースのメディアからデジタルの空間に広がった。Facebookでは多くの中国語詩のグループが結成され、新詩型に絶好の実験場所を提供している。たとえば、前述の「截句ブーム」が台湾で興ったきっかけも「台湾詩学社」のFacebookサイトである「吹鼓吹詩論壇」における截句募集であった。

2017年10月から、台湾のFacebook中国語現代詩団体「新詩路」がFacebookを通じて日本の俳句団体「俳句大学」と「華文二行俳句コンテスト」を共催した。現在までは冬・春・夏の季題などで三回のコンテストが行なわれ、今後も続くと予想される。

華文二行俳句の考え方は黄霊芝の湾俳に類似するところが多いが、参加者が「新詩路」に中国語現代詩を投稿する詩人であるので、「児童詩になりやすい」という傾向が避けられたと思われる。

華文二行俳句の書き方もこの一年間で徐々に整ってきたので、以下のようにまとめられるのではなからうか。

- (一) 華文俳句は無題であり、二行からなる。
- (二) 二行の間に「切れ」、つまり断絶が必要である。
- (三) 「二項対照組合」(取り合わせ)が必須である。
- (四) 季語の使用を勧めるが、例外的に「無季」も可能。
- (五) 現在と瞬間を詠み、過去と未来を詠まない。
- (六) 抽象を避け、具体的な物象人事を詠む。
- (七) できるだけ擬人法を使わない。

簡単に説明すると、一行目と二行目との間に意味上の「切れ」を必要とし、「切れ」の前後二行は二項目の「取り合わせ」となる。理論的に言えば、一行目と二行目はそれぞれ伝統俳句の「基底部」と「干渉部」にあたる。¹³

コンテストにおける季語は、とりあえず日本俳句の歳時記に従い、台湾およびその他の地域の投稿者の居住地域の季節に合わせて修正した部分もある。たとえば「帰郷」という言葉は日本語の帰省・里帰り(晩夏の季語)にあたるが、華人にとっては春節や清明節など帰省の多い春の季語へと修正されている。また、「擬人法」の使用禁止は、他の中国語短詩型との差別化を図るものであり、実際一回目のコンテストではモダンイズムの現代詩のような擬人法の多用でほとんど直感的観照が見当たらない。

① 三回のコンテストに投稿された二行俳句から数首を掲げる。

風鈴

風鈴

猫撲窗簾晃動

飛び掛る猫に揺れる窓掛け

(風鈴, 夏)

②

雙人鞦韆越盪越高

高くなる二人のブランコ

落日

落日

(鞦韆, 春)

③

吹茶

茶を吹く

松濤灌耳

松涛が耳に満つ¹⁴

(無季)

①に関しては、「風鈴」が季語であり、中国語には「切れ字」にあたるような助詞がないので、改行で「切れ」を表す。二行目は「基底部」にあたる。②に関しては、一行目が「基底部」で、二行目は「干渉部」にあたる。③に関しては、日本では「新茶」が夏の季語であるが、「茶」自体は季語ではない。あまり急須を使わない中国のお茶の飲み方では、淹れた茶の表面に浮いている茶葉を吹いて飲む。

華文二行俳句は以上のように、詩的完成度は比較的に高いが、まだ著名詩人の参加がなく、詩型として定着するには、実験の微調整を重ねていく必要がある。

四、まとめ

以上考察してきたように、中国現代詩における俳句の影響は欧米と比べて、まだ日が浅いといわざるを得ない。本格的な文学上の受容は、1990年から数えれば三十年ほど経っているが、受容のアプローチの違いを突き詰めてみると、俳句の本質とは何かということに帰す。三行という形式を不可欠要素として移植すべきか、それとも外面的形に拘らず、内外の瞬間的観照を表現することが大事かなど、おそらく考え方がそれぞれ異なるであろう。

もう一つ大事なものは、どうして俳句を書くのかという問題である。日本人でない以上、日本文学の伝承を受け継ぐ延長線上の「俳句」創作はありえない。書き易い短詩型と見て国際俳句を書く人がいる一方、俳句美学を取り入れて自国もしくは母語文学の詩を豊富にしていくな詩人もいる。また、主流の母語詩以外に、因襲にとられないオルターナティブな文学形式として国際俳句を書く詩人もいる。

後の二者の場合、正岡子規が現代詩を書く詩人に送る言葉を座右に置くべきではなからうか。

文章を作る者、詩を作る者、小説を作る者、俄かに俳句をものせんとしてその語句の簡単に過ぐるを覚ゆ。曰く、俳句は終に何らの思想をも現はす能はずと。しかれどもこれ聯想の習慣の異なるよりして来る者にして、複雑なる者を取って尽くこれを十七字中に収めんとする故に成し得ぬなり。俳句に適したる簡單なる思想を取り来らば何の苦もなく十七字に収め得べし。縦しまた複雑なる者なりとも、その中より最文学的俳句的なる一要素を抜き来りてこれを十七字中に収めなば俳句となるべし。¹⁵⁾

日本語表現である「十七字」はさておき、国際俳句を書こうとする詩人にとっては、初心者と違って、むしろ今まで身につけている母国語の詩の書き方を一旦忘れることが大事である。

中国語俳句の実験も、文学的にいえば、中国語現代詩のオルターナティブな美学として取り入れるべきではないかと考える。日本文学と日本文化に対する理解が深まっていく中、より多くの中国語母語者がこの実験の参加者に加わるので、中国語俳句の可能性が開かれていると言えよう。

注釈：

- 1 劉岸偉『周作人伝』（ミネルヴァ書房、2011年10月）。「小さな詩」、一六七―一七三頁。
- 2 訓読は筆者による。以下同。
- 3 1985年5月。後に『日本古典俳句選』（北京：人民文学出版社、2005年1月）に収められる。翻訳は筆者による。
- 4 翻訳は筆者による。
- 5 「俳縁、俳句、漢俳與我的俳句観」、『文芸理論與批評』（北京）1997年4月号。翻訳は筆者による。
- 6 香港文学報社、1991年10月。
- 7 翻訳は筆者による。
- 8 台北：皇冠文化出版、1993年10月。
- 9 言叢社、2003年4月。
- 10 同書、二九八―二九九頁。翻訳は黄靈芝による。
- 11 「十字詩論」、詩雜誌『笠』158号、1990年8月、一三七―一四〇頁。
- 12 「十字詩百首」『変』（台中市立文化中心、1993年6月）、四六頁。翻訳は筆者による。

13 川本皓嗣『日本詩歌の伝統―七と五の詩学―』（岩波書店、1991年11月）。「俳句の詩学」、六三―二二二頁。

14 日本語訳は台湾詩人の洪郁芬と筆者による。

15 『俳諧大要』（岩波書店、1955年5月）、「第五 修学第一期」。